

しもかけ
下懸遺跡

所在地 安城市小川町向田
(北緯34度54分20秒 東経137度5分43秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 平成26年1月～平成26年3月

調査面積 540㎡

担当者 宮腰健司



調査地点(1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年1月～平成26年3月にかけて実施した。調査区は鹿乗川に沿って、東西約7m、南北約77mに設定され、水路によって南北に分断される。調査区の呼称は本年度行われた床上浸水対策特別緊急事業(鹿乗川)に伴う調査と区別するため、13C区とした。

立地と環境 下懸遺跡は鹿乗川左岸の標高約7mの沖積地に立地する。発掘調査は平成12年度と21年度に行われており、弥生時代中期の河道や土器棺、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落や、古墳時代～中世の旧河道が検出され、赤彩された木製甲や習書・文書木簡などが出土している。

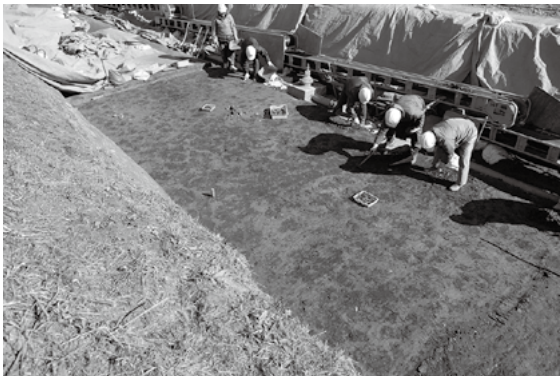
調査の概要 調査は古代～中世の遺物を含む暗褐色シルト層、弥生時代～古墳時代初期の遺物を含む黒褐色シルトを除去した後、明灰色シルト上面で遺構検出を行った。

調査区南半部については、古代以降の耕作の影響と考えられる地層の激しい攪拌のため、明灰色シルト面まで上層の土がブロック状に入り込んでおり、遺構の検出が困難であった。また遺物も大部分が小片となっていた。そのため攪拌土を除去した面を第2面として遺構の検出を行った。北半部では攪拌の影響は少ないが、竪穴建物など遺構の重複がみられた。

その結果、調査区北半部の水路より南では、古墳時代初期の竪穴建物8軒をはじめ北東から南西にかけて走る溝群や土坑が検出された。特に001SXは幅の広い周溝をもつ竪穴建物であることが判明した。また、当初多くの古墳時代初期の遺物が出土した大型土坑068SKは021SIに伴うと考えたが、別遺構である可能性もあり、021SIは長方形ではなく、正方形に近い形状となることも考えられる。

水路より北側で竪穴建物は検出されず、土坑や北に向かってゆるやかに下がっていく落ち込み、炭化物・焼土の広がりを検出した。

(宮腰健司)



明灰色シルト面(第1面)検出状況



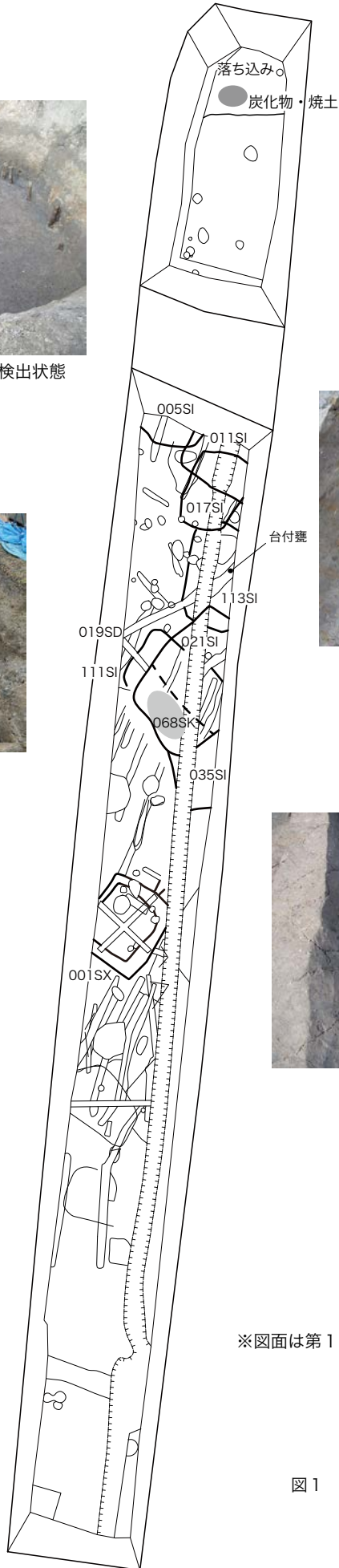
第1面全景(南から)



北部落ち込みと炭化物・焼土検出状態



北部竪穴建物群



019SD 台付甕出土状態



068SK 土器出土状態

0 (1:300) 10m

※図面は第1面と第2面を結合している。

図1 下懸遺跡 13C区全体図